

「トランポ ハリウッドに最も嫌われた男」

★★★★

★★

2016（平成28）年7月24日鑑賞<TOHOシネマズ西宮OS>

監督：ジェイ・ローチ

脚本：ジョン・マクナマラ

原作：ブルース・クック『Dalton Trumbo』（世界文化社刊）

ダルトン・トランポ（脚本家）／ブライアン・クランストン

クレオ・トランポ（ダルトンの妻）／ダイアン・レイン

ニコラ・トランポ（トランポ家の長女）／エル・ファニング

ミッツィ・トランポ（トランポ家の次女）／メーガン・ウルフ

クリス・トランポ（トランポ家の長男）／ミッチェル・サククス

ロイ・ブリューワー（下院非米活動委員会（HUAC）の委員、「全米俳優組合」の代表）／ダン・ペイクケダール

サム・ウッド（「赤狩り」に協力する映画監督、「アメリカの理想を守るための映画同盟」の会長）／ジョン・ゲッツ

ヘッダ・ホッパー（「赤狩り」に協力するコラムニスト）／ヘレン・ミレン

ルイス・B・メイヤー（MGM（メトロ・ゴールドウィン・メイヤー）創始者、映画プロデューサー）／リチャード・ポートナウ

ジョン・ウェイン（「赤狩り」に協力する俳優）／デヴィッド・ジェームズ・エリオット

エドワード・G・ロビンソン（トランポを裏切る俳優）／マイケル・スタールバーグ

パディ・ロス（トランポを裏切る映画会社）／ロジャー・バード

イアン・マクレラン・ハンター（『ローマの休日』にクレジットされているトランポの親友の脚本家）／アラン・テュディック

アーレン・ハード（トランポの親友の脚本家）／ルイス・C・K

フランク・キング（トランポに脚本を依頼するB級映画のプロデューサー）／ジョン・グッドマン

カーク・ダグラス（トランポに脚本を依頼する俳優）／ディーン・オゴーマン

オットー・プレミンジャー（トランポに脚本を依頼する映画監督）／クリスチャン・ベルケル

2015年・アメリカ映画・124分

配給／東北新社

<なぜ今まで無知だった？この男を永久にインプット！>

本作の原題は『TRUMBO』、原作はブルース・クックの『Dalton Trumbo』、要するに、人の名前だ。それに対して、邦題は『トランポ』だが、そこには『ハリウッドに最も嫌われた男』というサブタイトルがつけられている。これは「ドナルド・トランブ」なら、今やアメリカの共和党の大統領候補として日本人にも有名だが、「トランポ」と聞いても多くの日本人はその名前を知らないためだ。他方、9月22日からは堤幸彦監督の『真田十勇士』（16年）が公開されるが、多くの日本人は猿飛佐助、霧隠才蔵、三好清海入道をはじめとする「真田十勇士」の名前は知っていても、「ハリウッド・テン」の名前を挙げられる人はいないだろう。

ダルトン・トランポ（1905～1976年）は、1940年代にハリウッドで大活躍した映画の脚本家だ。少し映画に詳しい人なら、同時代に活躍したチャールズ・チャップリンやエリア・カザンの名前は知っているだろう。また、少しでもキネマ旬報主催の『映画検定』の勉強をした人なら、1950年代にアメリカに吹き荒れた「赤狩り」や、その犠牲とされた「ハリウッド・テン」を知っているだろう。近時は、「赤狩り」によって事実上の国外追放処分を受けた後、ずっとスイスのコルズイエ＝スジュール＝ヴェヴェイ村に居住したチャールズ・チャップリンの「遺体」を巡る騒動を描いた『チャップリンからの贈り物』（14年）が公開され、注目された（『シネマルーム36』78頁参照）。このように、喜劇王で映画監督のチャールズ・チャップリンや、『欲望という名の電車』（51年）、『エデンの東』（54年）等で有名なエリア・カザン監督の名前は知られていても、トランポの名前が知られていないのは、やはり監督と脚本家という「地位の違い」によるもの・・・？

ちなみに、本作鑑賞後、私が2006年3月に映画検定3級に合格した時の教科書である『映画検定公式ガイドブック』（キネマ旬報社刊）を確認してみると、「ハリウッド・テン」の解説の中にはちゃんとトランポの名前が挙げられていた。

私はその名前を覚えていなかったため、たまたまその時の試験問題に出なかったのはラッキーだったが、本作によってトランポという脚本家のすごさにびっくりするとともに、今後はその名前を永久にインプット！

<本作はドキュメンタリー？本作の監督は？脚本は？>

本作はドキュメンタリー？イヤイヤそうではない。「ハリウッド・テン」の一人としてブラックリストに載せられ、脚本家としての活動を一切できなくされていたトランポのドキュメンタリー映像が残っているはずがない。

多くのプロデューサーが名前を連ねている本作は、ブルース・クックの原作『Dalton Trumbo』を基に、ジョン・マクナマラが脚本を書き、ジェイ・ローチが監督した映画だ。私は冒険にして、これらすべてのスタッフの名前を知らなかったが、本作の脚本を書いたジョン・マクナマラは、本作でトランポの親友として登場してくる、実在の脚本家イアン・マクレラン・ハンターの弟子の一人らしい。

イアン・マクレラン・ハンターは世界中の誰からも愛されているオードリー・ヘプバーン主演の『ローマの休日』（53年）で第26回アカデミー賞の原案賞を受賞しているが、彼は「影武者」に過ぎず、同作の脚本を書いたのはトランポだということを知って初めて知った私はビックリ！もっとも、そのことはイアン・マクレラン・ハンターの弟子の一人であるジョン・マクナマラですら知らなかったようだ。また、ジョン・マクナマラの世代は軒並み、マッカーシー議員を中心とした「下院非米活動委員会（HUAC）」の「赤狩り」や「破壊分子」としてブラックリストに載せられることの影響も知らなかったらしい。

本作はそんなジョン・マクナマラがトランポの伝記やトランポの長女ニコラが書いた記事等を読んだことで目の前が開け、本作の脚本に着手できたらしい。なるほど、なるほど・・・。すると、本作の登場人物は全員実在の人物・・・？

<生涯の親友だった2人の脚本家に注目！>

本作には生涯トランポの親友であり続けた実在の脚本家イアン・マクレラン・ハンター（アラン・テュディック）が登場するので、それに注目！彼が『ローマの休日』の脚本を書いたトランポに対して、「タイトルを変更した方がいい」とアドバイスを与え、またトランポの「影武者」としてアカデミー賞の原案賞を受賞する姿は何とも興味深い。

他方、もう一人、こちらも生涯トランポの親友であり続けた脚本家ながら、病気で先に死んでしまう男アーレン・ハード（ルイス・C・K）が登場するので、こちらにも注目！彼は同じ共産主義者でも、「現実派」のトランポとはかなり違う「急進派」だから、「赤狩り」の嵐が吹き荒れる中、しばしばトランポと生き方が食い違うことになるが、それでも生涯の友であったことには変わりがない。もっとも、このアーレン・ハードだけは実在の人物ではなく、ジョン・マクナマラがトランポの友人関係にあった実在の脚本家のうち、ガチガチの共産主義者を全員集めて盛り込んだ役柄らしいから、要注意だ。

<敵対する者は？支援する者は？裏切る者は？>

本作はドキュメンタリーではなく、ジョン・マクナマラが脚本を書いた劇映画だが、登場人物は前述したアーレン・ハード以外はすべて実在の人物。とりわけ、映画俳優のジョン・ウェイン（デヴィッド・ジェームズ・エリオット）やカーク・ダグラス（ディーン・オゴーマン）は有名だが、彼らはトランポといかなる関係に？

本作には、まず「赤狩り」を積極的に推し進めた実在の人物として①下院非米活動委員会（HUAC）の委員で、「全米俳優組合」の代表のロイ・ブリューワー（ダン・ペイクケダール）、②「アメリカの理想を守るための映画同盟」の会長で、『誰が為に鐘は鳴る』（43年）の監督であるサム・ウッド（ジョン・ゲッツ）、③50歳過ぎてゴシップ・コラムニストに転身する中で、「赤狩り」に大きな影響力を持つようになったコラムニストのヘッダ・ホッパー（ヘレン・ミレン）、④MGM（メトロ・ゴールドウィン・メイヤー）創始者で映画プロデューサーのルイス・B・メイヤー（リチャード・ポートナウ）が登場するので、それに注目！

他方、逆境にあるトランポを支援する人物として、①ブラックリストに載ったトランポを偽名で雇い、多くの仕事を与えたB級映画のプロデューサーであるフランク・キング（ジョン・グッドマン）、②トランポに脚本を依頼した『栄光への脱出』（60年）で有名な映画監督のオットー・プレミンジャー（クリスチャン・ベルケル）、③トランポに脚本を依頼した『スバルタカス』（60年）等で有名な俳優のカーク・ダグラスが登場するので、それにも注目！

さらに、本作にはトランポが同志として共に活動が続けていた、①映画会社のパディ・ロス（ロジャー・バード）、②俳優のエドワード・G・ロビンソン（マイケル・スタールバーグ）が、トランポを裏切る立場になる人物として登場するので、それにも注目！

<時代は？迫害は？トランポの生き方は？>

本作冒頭は1947年。ハリウッドの売れっ子脚本家、ダルトン・トランポ（ブライアン・クランストン）が妻クレオ（ダイアン・レイン）、長女ニコラ（エル・ファニング）をはじめとする3人の子供と共に、ロサンゼルス郊外の立派な一軒家で幸せな日々を送っているシーンが描かれる。しかし、アメリカとソ連の関係が悪化する中、アメリカ国内から共産主義者を排除しようとする合衆国議会の下院非米活動委員会（HUAC）による「赤狩り」がはじまり、その矛先はハリウッドにも向けられた。その結果、議会からトランポに対してワシントンD.C.での公聴会に出席するようにとの召喚状が届き、出席したトランポに対して、「君は共産主義者か、それともかつてそうだったか」との質問に、YESかNOで答えるよう強要されたが、それに対するトランポの回答は？

アメリカは自由の国、かつ言論の国。そう思い込んでいた私にとって、こんなシーンはショックだったが、『キネマ旬報』で勉強した「マッカーシー旋風」、「赤狩り」の実態はこんなもの・・・。その結果、議会侮辱罪で訴追され、国家の転覆をたくむ破壊分子というレッテルを貼られ、「ハリウッド・テン」に名前を連ねたトランポは、脚本家としての仕事をすべて失ってしまうことに。さらに、1950年6月、有罪を宣告されたトランポは、刑務所に収監されることに。さあ、トランポとその家族たちは、これからどのように生きていくの？それが本作中盤最大のテーマだ。

<仕事へのバイタリティと、生きるための才覚に感服！>

こんな「迫害」はトランポにとってはもちろん、家族にとっても大変なこと。したがって、前述したパディ・ロスやエドワード・G・ロビンソンのように、「転向」してしまう、かつての「同志」が現れたもの仕方ないが、本作中盤に見るトランポの頑張りはずい。とりわけ、お金と女が大好きで、政治にも社会にも興味がなく、トランポが安くていい脚本を書くのなら偽名でいくらでも雇うという、これも前述したB級映画のプロデューサーであるフランク・キングとの出会いは面白いので、そのストーリー展開とトランポの頑張り注目！

また、私は子育てもすべて妻に任せてしまう「仕事人間」だったと自負しているが、トランポは私以上のハチャメチャな「仕事人間」。娘の誕生日も無視して、風呂場にもこもり、脚本のタイプ打ちに熱中する姿は興味深い。もちろん、年頃になった長女ニコラとの衝突や、長年我慢に我慢を重ねてきた妻クレオとの衝突が何度か生まれたのは当然だが、トランポの脚本書きという仕事へのバイタリティと、家族が喰っていくための才覚は、そんな衝突を見事に乗り越えていくから、それに注目！『ローマの休日』でイアン・マクレラン・ハンター名でアカデミー賞の原案賞を受賞し、1957年に『黒い牡牛』（56年）でロバート・リッチ名でオスカーを受賞したのは、さぞかし嬉しかったことだろう。

本作中盤に見るトランポの仕事へのバイタリティと、生きるための才覚に感服！

<『スバルタカス』とカーク・ダグラスに一層の愛着が！>

本作にはジョン・ウェインとカーク・ダグラスという、ハリウッドに実在した超大物俳優が登場する。もっとも、本作はドキュメンタリーではないから、この2人はホンモノではなく、今の時代の俳優が演じているが、どう見てもジョン・ウェインはホンモノには似ていないのが残念。しかし、『スバルタカス』の脚本を何が何でもトランポに書いてほしいと依頼してくるカーク・ダグラスは、ホンモノそっくり(?)だから面白い。

本作に登場する『ローマの休日』のワンシーンは、オードリー・ヘプバーンとグレゴリー・ペックが演じた有名な、嘘つきはこの口の中に手を入れると噛み切られてしまうという「真実の口」のシーンそのものだが、『スバルタカス』の導入部に登場する、奴隷同士の決闘シーンはホンモノの映像ではなく、本作でカーク・ダグラスを演じたディーン・オゴーマンがそのシーンそっくりのシーンを演じたものだ。言うまでもなくカーク・ダグラスは『コーラライン』（85年）、『ウォール街』（87年）、『氷の微笑』（92年）等で有名な俳優マイケル・ダグラスの父親だが、父子そろって、長くたった顔が特徴。よくそホンモノによく似た俳優を連れてきたものだと思感するとともに、「ハリウッド・テン」に名を連ねていようが、偽名で活動していようが、「良いものは良い」と割り切り、あの名作『スバルタカス』の脚本をトランポに書いてもらうことにこだわった、カーク・ダグラスのホンモノの目に感服！

『スバルタカス』は2カ月ほど前にテレビからの録画で久しぶりに鑑賞したが、その脚本をトランポが書いたと知り、その作品と俳優カーク・ダグラスに一層の愛着が湧いてくることに・・・。

<正義は勝つ！努力は報われる！そんな結末に注目！>

本作の原作はブルース・クックが書いた『トランポ ハリウッドに最も嫌われた男』だが、本作の脚本を書いたジョン・マクナマラがバンフレットで言っており、「珍しいことに、これはハッピーエンドの実話」。ベツレヘムに生まれたイエス・キリストは成人して布教活動を展開したが、ユダの密告によってローマ帝国に捕えられ、磔の刑で死亡(?)した。また、『スバルタカス』で描かれた「スバルタカスの反乱」は結局ローマ帝国によって鎮圧され、スバルタカスは死亡した。それと同じように、1950年代に全米で吹き荒れた「マッカーシー旋風」による「赤狩り」によって、「ハリウッド・テン」をはじめとする共産主義者はすべてこっぴどい迫害、弾圧を受けたから、その名誉回復や復活は到底不可能。現に、トランポの親友の脚本家で「急進派」だったアーレン・ハードは大病を患って死亡してしまった。それに対して「現実派」で、生きるエネルギー、仕事のエネルギーに満ち溢れていたトランポは偽名での脚本家業を精力的に続けたが、さてその結末は・・・？

アメリカ合衆国でアメリカ共産党が非合法化されたのは1954年だが、その同じ年に、エド・マローによるマッカーシー批判と、マッカーシー非難決議が採択された。これによって、以降「赤狩り」旋風は終焉に向かい、「ハリウッド・テン」も一人また一人と名誉回復が進んでいった。そして、トランポも1960年には『栄光への脱出』と『スバルタカス』で業界に復帰し、以降はクレジットにも本名が載ることになったが、こんなハッピーエンドは珍しいはずだ。ちなみに、オットー・プレミンジャー監督の『栄光への脱出』は映画のストーリーよりも美しい映画音楽の方を私はよく覚えているし、それに主演したポール・ニューマンは私の大好きな俳優だった。

本作のバンフレットには「冷戦時代とハリウッド」と題された詳細な年表があり、「トランポ関連の人脈・事件」、「ブラックリストの人脈・事件」「米国及び国際情勢」という3つの項目でポイントがまとめられているから、これは必見！貴重な資料だ。これを見れば、トランポは1960年の「名誉回復」の後、1976年に死亡する直前まで脚本家として精力的な活動を続けていたことが明らかだから、あらためてそのエネルギーに感服するとともに、その幸せな人生に拍手を送りたい。また本作を観ていると、いかにも壊れてしまいうさだだったトランポとクレオとの夫婦関係、トランポと長女ニコラとの父娘関係も、その後は円満に進んだことが明らかであるうえ、妻のクレオは1993年には『ローマの休日』のオスカー像を正式に受領するという栄光にも浴しているから、クレオもさぞ嬉しかったことだろう。

こんなすばらしい人生を送ったトランポ夫婦に拍手！